

人間発達学部

教養部会准教授 森田 裕之

1. 研究活動

a 演奏会・展覧会・競技会等の名称・著書・論文・作品等の名称（項目ごとに記入する）	b 発表または発行の年月日	c 演奏会・展覧会の会場・主催等または論文等の発行所・発表雑誌等の名称	d 発表・展示・作品等の内容等・論文概要等（共著の場合のみ編者・著者名を記入）
ドゥルーズ＝ガタリのシステム論の教育学的再構築—生成と流動の教育学のために	2010. 12	京都大学大学院教育学研究科	本稿は内見に提出された博士学位論文である（内見は通過。2011年8月8日までに本提出の予定）。従来の教育学は、ヘーゲルの弁証法を思想的起源とする発達を基本概念として造形されてきた。しかし、変容論理にはヘーゲルの弁証法とは別に、それとは異質なニーチェの価値転換の論理と、弁証法を極点まで推し進めたバタイユの留保なきヘーゲル主義とがある。この両者のそれぞれを思想的起源として生成と再生という諸概念を考えることができる。この生成は、例えばアルルで人間ゴッホが独自の様式をもった真の意味での芸術家ゴッホになる超人間化として歴史的に立ち現れる変容概念であり、再生は遊びを通して脱自し新しい私に生まれ変わる覚醒体験として具体的に立ち現れる変容概念である。本稿では、ヘーゲル、ニーチェ、バタイユの思想を参照項としながら、ドゥルーズ＝ガタリのシステム論を教育学的に読み替え再構築することによって、発達と生成と再生という相互に次元を異にする諸変容概念を基軸とした「生成と流動の教育学」を作り上げることを目指す。この教育学は、従来の教育学が生成と再生という諸変容概念を正しくとらえることに失敗している点でその教育学を全面的に批判し、それに取って代わり得る新たな理論なのである。

<p>教育学の問題点とその意味</p>	<p>2011. 3</p>	<p>『名古屋芸術大学研究紀要』第 32 巻 pp.325-337.</p>	<p>本稿では、教育学の問題点を指摘することを試みた。この試み自体は、これまで数多くなされているので決して新しいものではない。しかし、本稿の独自性はこの試みを、教育学の領野では顧みられることがなかったドゥルーズ=ガタリを準拠棒としておこなう点である。一般に教育学の本源は、教育とは前人間的なことを人間に発達させることをいうのだという教育観である。この教育観が前提としているのは、人間とは神や理性といった支配項に隷属した諸記号のことをいうのだという人間観だ(この諸記号は構造主義的な意味での諸記号である)。このときドゥルーズ=ガタリによれば、人間というのは隷属状態にあるにもかかわらず、諸記号とは異質な自由なあり様に創造的に生成することが可能であるという。教育学の問題点は、先の人間観がこの生成の可能性を取り逃がしているという点である。しかしながら、この問題点の解消によって教育学を再生させることができるので、この問題点は単なる学的不備ではなく、教育学再生の可能性の中心を意味しているのだ。</p>
---------------------	----------------	--	--

2. 教育活動（教育実践上の主な業績）

大学院授業担当 有 無

3. 学会等および社会における主な活動